よしつねせんぼんざくら

義経千本桜

〔解　説〕竹田出雲、三好松洛、並木千柳の合作。延享四年(一七四七)大坂竹本座初演。全五段の時代物。この作品は「仮名手本忠臣蔵」「菅原伝授手習鑑」と共に浄瑠璃の三大傑作とされています。義経伝説の堀川夜討ち、大物浦、吉野落ちの三事件を骨子とし、そこに壇ノ浦での平家滅亡に際して死んだとされた知盛(とももり)、維盛(これもり)、教経(のりつね)が、実は生きていて源氏に復讐しようとする筋がからませてあります。

〔あらすじ〕

序　段＝義経は平家追討の功により、後白河法皇から初音の鼓を賜りますが、実はこれには頼朝追討の院宣(いんぜん)が託されていました。頼朝は義経に使者を遣わし、知盛・維盛・教経の首が偽首であった事、初音の鼓の事を詰問します。義経は申し開きをしますが、正妻卿の君が平家一門の時忠の娘であるということに対しては返答に窮するのでした。卿の君は自ら命を断って和睦をはかりますが、追っ手に押し寄せた土佐坊を弁慶が切った事により全ては水の泡となり、義経は都を落ちていったのでした。

二段目＝義経は、あとを慕ってきた愛妾静御前(しずかごぜん)を折良く来合わせた家臣佐藤忠信に託して、九州へと落ち延びるため大物浦(だいもつのうら)渡海屋銀平宅で船出を待ちます。やがて船出した一行に銀平に扮していた平知盛が襲いかかります。綿密な計画に従っての行動であったはずが、ふと気づくと事態はいつの間にか壇ノ浦の合戦の再現になっているのでした。全てが徒労に終わった事を悟った知盛は、守り通してきた安徳帝を義経に託し、碇を背負って海へと飛び込み、壮絶な最期を遂げます。

三段目＝**〔小金吾討死の段〕**維盛の妻子、若葉の内侍(ないし)と若君六代君(ろくだいきみ)は、主馬小金吾(しゆめのこきんご)の供で高野を目指しますが、途中でいがみの権太に金を騙し取られてしまいます。内侍らに源氏の討手がかかり、小金吾は討ち死してしまいます。が、そこへ通りかかった鮓屋の弥左衛門が何を思ったか小金吾の首を切って持ち帰ります。

〔すしやの段〕弥左衛門はその昔、平重盛に恩を受けた身であったため、維盛を奉公人の弥助として匿っていました。事情を知らない娘のお里は、弥助と夫婦になることを望んでいましたが、追われた内侍と若君が鮓屋に逃げ込むと、事情を理解し、三人を逃がします。母親に金の無心をしようと忍び込んでいた権太が褒美目当てに跡を追います。弥左衛門は討手の梶原に偽首の入った鮓桶を出しますが、その中に会ったのは権太が母親から騙し取った金でした。そこへ権太が首の入った鮓桶を梶原に差し出して、褒美の羽織を受け取りますが、激怒した弥左衛門は権太を刺します。しかし、権太は苦しい息の下で、首は小金吾のもの、内侍と若君は自分の妻子であったと父に告げるのでした。そこへ現れた維盛が梶原の置いていった羽織を裂くと、中から袈裟衣が現れて、実は頼朝もかつて重盛に助けられた恩返しに、維盛を助けるつもりであったことが判るのでした。

四段目＝吉野の河連法眼(かわつらほうげん)の館に匿われている義経のもとへ国元に帰っていた佐藤忠信が尋ねて来ますが、そこへ静御前の供をしたもう一人の佐藤忠信が現れます。不審に思った義経が静御前に詮議させると、実は初音の鼓の皮に張られた狐の子が、親を慕って忠信に姿を変えていたことが判ります。義経から鼓を与えられた子狐は、責めてくる教盛を狐の力で散々悩ませて義経の恩に報いるのでした。

五段目＝頼朝と義経の仲を裂こうとした藤原朝方は教経に討たれ、忠信もまた教経を討って八島の戦いでの兄の敵を取ります。

(一般社団法人　義太夫協会発行)

小金吾討死の段

諸共立ち帰る

夕陽西へ入る折から、主馬の小金吾武里は、上市村にて朝方が追手の人数に取り巻かれ、数ケ所の疵を負ひながら内侍若君御供申し、一先づ都へ立ち帰るを、後に続いて数百人、遁さぬやらぬと追っかけたり。手疵は負へども気は鉄石の武里が、死に物狂ひと思ひの刃、こゝに三人かしこに七人、ばらりばらりとなぎ倒し、その身は秋の花紅葉敵は木の葉のその後へ、追手の大将猪熊大之進、遅ればせに駈け来たり

「ヤア死に損ひめいづくへ行く。先頃嵯峨の奥にて取り逃がし、主人朝方の御機嫌以ての外。すごすご館へ帰られず、庵坊主めに白状させ付け廻したるこの海道。サア維盛の御台若君を渡し、腹かっさばけ」

と呼ばはったり。手負ひは流るゝ血汐をぐっと一飲み息を継ぎ

「主馬の判官が倅小金吾武里、息ある中はいっかないかな」

「ヲその一言が絶命」

と、踊り上がって討つ太刀を、てうど請け止めはっしと跳ね、ひらりと見せてはくるりとはづし、手練を尽くせどさすがは手負ひ。内侍若君あぶあぶひやひや、小石を拾ひ砂打ち付け、及び腰なる加勢も念力。手強く見ゆる猪熊が眼に入って目あては暗闇、透間に切り込むだんびらに、眉間を割られて頭転倒、乗っかゝるを下よりも突く、

鋏（きっさき）はあばら骨、金吾ものっけに反り返る。あなたが起きれば石礫（いしつぶて）、猪熊切られ小金吾も、ともに深手の四苦八苦修羅の衢（ちまた）ぞ危ふけれ。忠義の天成（てんせい）小金吾が、難なく相手を取って押さへ、ぐっと突っ込む止（とど）めの刀

「サア仕負ほせし嬉しや」

と、思ふ心のたるみにや、『うん』とその身も倒れ伏す

「ノウ悲しや」

と内侍若君いたはりかゝへ抱き起こし

「コレのふ金吾、金吾いのふ。気をはっきりと持ってたも。そなたが死んで自らや、この子は何となるものぞ。情なや悲しや」

と、泣き入り給ふ御声の、耳に通って顔振り上げ

「ヲヽ内侍様六代様、あきらめて下さりませ。心は弥猛（やたけ）にはやれども、もふ叶はぬ。コレ申し若君様、今際（いまわ）のきはに金吾めが申す事、よふお聞き遊ばせや。我が君維盛様は、かねて御出家のお望み。熊野浦にて逢ひ奉りしと云ふ者ある故、高野山へと志し、お二方をお供したれど、なかなかこの手では一足も行かれず。先君小松の重盛様は日本の聖人、若君様はその孫君。諸神諸菩薩の恵みのない事はござりますまい。末頼みに思し召して、必ず短気をお出しなされな。あれあれ、向ふへ提灯の灯影（ひかげ）、又も追手の来たるも知れず。若君伴ひ、この場を早く早く」

「イヤイヤ深手のそなたを見捨て置いて、いづくを当てに行くものぞ。死なば共に」

朝(あした)の露と消へにける

と座し給へば、「チェヽふがひない、六代様は大事にないか。この手で死ぬる金吾めではござりませぬ。聞き入れなければ直(すぐ)に切腹」

「アヽコレ待ってたも。それ程にまで思やるなら、成程先へ落ちませう。必ず死んでたもるなや」

「お気遣ひ遊ばすな。運に叶ひ後より参ろ」

「必ず待って居るぞや」

と、云ふ間に近付く提灯の、灯影に恐れ是非なくも、若君連れて落ち給ふ。御心根ぞいたはしき。手負ひは御後見送り見送り

「死なぬと申せしは偽り。三千世界の運借っても、何のこの手で生きられませふ。内侍様、六代様、これがこの世のお別れでござります」

と、思ふ心も断末魔、知死期も六つの暮過ぎて、

すしやの段

神ならず仏ならねばそれぞとも知らぬ道をば行き迷ふ、若葉の内侍(ないし)は『若君を宿ある方へ預け置き、手負のことも頼まん』と思ひ寄る身も縁の端、この家を見かけ戸を打ち叩き

「一夜の宿」

と乞ひ給へば、維盛はよい退きしほと表の方、叩く枢(とぼそ)に声を寄せ

「この内は鮓商売、宿屋ではござらぬ」

と、愛想のないが愛想となり

「イヤこれ申し、稚きを連れた旅の女、是非に一夜」

と宣ふにぞ

「断り言ふて帰さん」

と戸を押し開き月影に、見れば内侍と六代君、『ハツ』と戸を鎖(さ)し内の様子、娘の手前もいぶかしく、そろ〳〵立ち寄り見給へば、早くも結ぶ夢の体(てい)、表に内侍は不思議の思ひ

「今のはどふやらわが夫(つま)に、似たと思へど形容(なりかたち)、つむりも青き下男(しもおのこ)、よもや」

と思ひ給ふうち、戸を押し開いて維盛卿

「若葉の内侍か、六代か」

と、宣ふ声に

「ヒヤア、さてはわが夫」

「父様か」

「ノウなつかしや」

と取り縋り、詞はなくて三人は、泣くより他の事ぞなき

「まづまづ内へ」

と密かに伴ひ

「今宵は取り分け都の事、思ひ暮してゐたりしが、親子共に息災で不思議の対面、さりながら某この家にゐる事を、誰(た)が知らせしぞ殊(こと)にまた、遙々の旅の空、供をも連れぬも心得ず」

と、尋ね給へば若葉の君

「都でお別れ申してより、須磨や八島の軍(いくさ)を案じ、一門残らず討死と聞く悲しさも嵯峨の奥、泣いてばつかり暮らせしに、高野とやらんにおはするといふ者のある故に、小金吾召し連れお行方を志す道追手に出合ひ、可愛や金吾は深手の別れ、頼みも力もない中に、廻り逢ふたは嬉しいが、三位中将(さんみ)維盛様がこのお姿は何事ぞ。袖のないこの羽織に、このおつむりは」

と取りついて咽(むせ)び絶へ入り給ふにぞ、面目なさに維盛も、額に手を当て袖を当て、伏し沈みてぞおはします。涙の内にも若葉の君、伏したる娘に目を付け給ひ

「若い女中の寝入端(ねいりばな)、定めてお伽の人ならん。かくゆるかしきお暮らしなら、都の事も思し召し、風の便りもあるべきに、打ち捨て給ふは胴慾」

と恨み給へば

「ホヽオそれも心にかゝりしかど、文の落ち散る恐れあり。わけてこの家の弥左衛門、父重盛の恩報じと、われを助けてこれまでに、重々厚き夫婦が情け。何がな一礼返礼と思ふ折柄娘の恋路、つれなく言はゞ過ちあらん。かへつて恩が仇なりと、仮の契りは結べども、女は嫉妬に大事も洩すと、弥左衛門に

も口留して、わが身の上は明さず、仇な枕も親共へ、義理にこれまで契りし」
と、語り給へば、伏したる娘堪へ兼ねしか声上げて、
『わつ』とばかりに泣き出す
「コハなに故」
と驚く内侍、若君引き連れ逃げ退かんとし給へば
「ノウこれお待ち下され」
と、涙と共にお里は駆け寄り
「まづ〳〵これへ」
と内侍若君上座へ直し
「私は里と申してこの家の娘。いたづら者憎い奴と、思し召されん申し訳。過ぎつる春の頃、色珍しい草中へ、絵にある様な殿御のお出で、維盛様とは露知らず女の浅い心から、可愛らしいいとしらしいと思ひ染めたが恋のもと。父も聞こえず母様も、夢にも知らして下さつたら、たとへ焦がれて死ぬればとて、雲居に近き御方へ、鮓屋の娘が惚れられふか。一生連れ添ふ殿御ぢやと、思ひ込んでゐるものを、二世の固めは叶はぬ親への義理に契つたとは、情ないお情に預かりました」
とどうど伏し身を震はして泣きければ

傾城恋飛脚

けいせいこいびきゃく

〔解　説〕安永二年(一七七三)豊竹比吉座初演。近松門左衛門の「冥途の飛脚」を菅専助・若竹笛躬らが改作。梅川忠兵衛の哀れと、その父孫右衛門の情愛がしんみりと描かれた下の巻「新口村」が現在でもたびたび上演され、近松原作の「封印切」の後にこの段が上演される事もあります。歌舞伎の「恋飛脚大和往来」にも取り入れられ、浄瑠璃でもこの外題が使用される事もあります。

〔あらすじ〕飛御座亀屋の養子忠兵衛が恋仲の遊女梅川の身請の手付金として、恋敵の八右衛門の為替金を流用したことから、忠兵衛の許婚〝おすは〟は我が身を犠牲にして金を盗み出そうとしたり、梅川の父と兄は芝居を打ってまで金を作ろうと画策します。一方、亀屋の分家和平は八右衛門と組み、忠兵衛に罪を着せ更に毒殺しようと企てますが、逆に自分の罪がばれてしまいます。八右衛門は梅川の身請金を持って来ますが、梅川と忠兵衛の事情を聞いている親方は受け取ろうとしません。忠兵衛はたまりかねて持ち合わせていた三百両の封を切り梅川を身請します。喜ぶ梅川に、実はその金は公金であった事を打明け、覚悟を決めた二人は大和へと落ちて行きます。

「新口村の段」忠兵衛の故郷新口付に着いた二人は、道場帰りの人の中に親孫右衛門を見つけますが、世の義理から出ていくことがせきません。梅川は雪道で転んだ孫右衛門を介抱し、それとなく名乗ります。養子親への義理を立て、目隠しをして忠兵衛に会った孫右衛門は二人に金を与えて逃してやるのでした。

新口村の段

孫右衛門は老足の、休み〳〵門を過ぎ、野口の溝の薄氷、滑るをとまる高足駄。鼻緒は切れて横ざまに、どふと転べば

『南無三』と、忠兵衛もがけど出られぬ身、梅川慌て走り出で、抱だき起しつ裾絞り

「申し〳〵、どこも痛みは致しませぬかへ。お年寄の危ないこと、オヽマ危ないこと。お足も洗ひ、鼻緒もすげて上げませふ。マア〳〵こちへ」

と手を引いて、うちへ伴ひ上り口、腰膝撫でて労はれば、孫右衛門は気の毒さ

「アヽ戴きます〳〵。どなたか知らぬが忝ない。お蔭で怪我も致しませなんだ。アヽ若い女中のおやさしい。年寄りと思し召して、嫁子もならぬ御介抱、もふ〳〵手を洗はしやつて下さりませ、ハテマア手を洗はしやつて下さりませ。幸ひ庭に藁は沢山、鼻緒はわしがすげます」

と懐捜して取り出す塵紙

「アヽ申し、こゝによい紙がござんす。こより捻つてあげましよ」

と延べ紙引き裂くその手元、不思議そふに打ち守り

「こゝら辺りに見馴れぬ女中。マアこなさんはどなたなれば、このやうに懇ろにして下さります」

と、顔つれ〴〵と眺むれば、梅川いとゞ胸つぼらしく

「ハイ私は、旅の者。私が舅の親父様、丁度お前の年配で、恰好も生き写し。他の人にする奉公とは、さら〳〵もつて存じませぬ。お年寄つた舅御の、臥

し悩みの抱きかゝへ、孝行は嫁の役。御用に立つて嬉しいもの。さぞ連れ合ひは飛び立つ、サア飛び立つやうにござりましよ。その紙とこの紙と替へてわたしが申し請け、連れ合ひの肌に付けさせて、父御に似た親父様の形見にさせたふござんす」

と塵紙袖に押包む、涙にそれとは知られけり。詞の瑞に孫右衛門、『さてはそふか』と恩愛の、尽きぬ涙を押し隠し

「フウこなたの舅にこの親父が似たと云ふての孝行か。エヽ嬉しうござる。ガ腹が立ちますわい。わしも年たけた倅めを様子あつて久離切り、大坂へ養子にやつたが、傾城といふ魔がさして、人の金を盗んだとやら、挙句に所を走つた噂。この大和は生国なれば、十七軒の飛脚屋仲間、お上からも隠し目付、或ひは巡礼古手買ひ、節季候にまで身をやつし、この在所はモウ〳〵詮議最中。誰ゆゑなれば、その傾城の嫁御ゆゑ。近頃愚痴なことなれど、世のたとへにも言ふとほり、盗みする子は憎ふなふて縄かける人が恨めしいとはこのこと。久離切つた親子なれば良からふが悪からふが構はぬこととは思へども、大坂へ養子に行て利発で器用で身をもつて身代もよふ仕上げた、あのやうな子を勘当した親は大きな戯け者と、指差しられ笑はれたら、その嬉しさはどふあらふ。今にもつい捜し出され、縄かゝつて引かるゝ時、孫右衛門は目水晶。よふ勘当したでかしたと、誉められるのがおりや悲しい、誉められるのが悲しうござるはい。アヽそれを思へば一日も早ふ往生お救ひと、拝み願ふは今参る如来様御開山。コレ、マ

仏に嘘がつかれふか」
と、どふどひれ伏し悶え泣き。梅川も声を上げ、忠兵衛は障子より、手先を出し伏し拝み、身をもみ歎くぞ道理なる。なほも涙を押し拭ひ
「様子聞いたか聞かぬか知らぬが、子を釣り出そふとお上の計らひ。養ひ親の妙閑殿。一昨日牢へ入れられたげな」
「エヽ」
「サヽヽそれでつく〴〵思ふには、実の親を頼りにして、もしも忍んで来はせまいか、来たらばなんぼう不便でも、養子親への義理あれば、匿ふことはさて置いて、親が縄かけ出さねばならぬ。アヽどふぞ来てくれねばよいが。こゝら辺りを舞ひ〳〵〳〵舞ひ付きはせまいかと、四年このかた逢ひもせず懐かしい子の顔を、見ぬやうに、見ぬやうにと、雑行ながら神たゝきも、不便さからでござるはい不便さからでござるはいの。アヽとは云ふものゝ、若死するも人の一生。義理ある親を牢へ入れ、おめ〳〵と逃げ隠れは、末世末代不孝の悪名。所詮逃れぬ命なら、一日なりと妙閑殿を、早ふ牢から出すのが孝行。サヽヽヽヽ覚悟極めて名乗つて出い〳〵アヽ今じやない〳〵。今の事ではないはいやい。シタガそれもどうぞ親の目にかゝらぬところで、縄かゝつてくれヨ。現在血を分けた子に、早ふ死ねと教へるも、浮世の義理か是非もなや。なぜ前方に内証で、かう〳〵した傾城にかうした訳で金が要ると、便宜でもしをつたら、久離切つても親子じやもの。隠居の田地を売り立てゝも首縄はかけまいに。皆あいつが心

から、その身も狭い苦をしをつて、いとしぼなげに嫁御にまで、思ひもよらぬ憂目を見せ、知音近附き親にまで、隠れるやうに身を持ちなし、碌な死もせぬやうにこの親は産み付けぬ。エヽ憎いやつじや憎いやつじや〳〵と思へども、可愛ふござる」

と泣き沈み分けたる、血筋ぞ哀れなる。涙の隙に巾着より、金一包取り出し

「これは京の御本寺様へ、上げふと思ふた金なれど、嫁と思ふてやるではない。たゞいまのお礼のため。これを路銀にちつとなと、遠い所へ行て下され」

と、渡せば、梅川押しいたゞき

「お心づいたこのお金、逆様ながら戴きます。大坂を立ち退いても、私が姿目に立てば、借駕籠に日を送り、奈良の旅籠屋三輪の茶屋、五日三日夜を明かし、二十日あまりに四十両使ひ果して二歩残る。金ゆゑ大事の忠兵衛様、科人にしたも私から、さぞ憎からふお腹も立たふが、因果づくと諦めて、お赦しなされて下さりませ。親子は一世の縁とやら、この世の別れにたつた一目、逢ふて進ぜて下さんせ」

と、奥の障子を開るを、引止め

「アヽコレコレ女中。アノ物音は確かに捕手。この裏道の小川を渡り、薮を抜ければ御所街道。サヽヽ早ふ〳〵」

と気をもむ所へ、巡礼姿の八右衛門、利平も共に蚤取り眼。役人大勢打ち連れだち

「この内が気塞いな」

とどか〳〵〳〵と込み入るところへ、組子一人駈け来り

「ところは長谷の山続きに、梅川忠兵衛と名乗る者。休みおつたを追つ取り巻き、からめ捕らんと致せども、仲々手に合ひ申さず」

と、聞くより小頭

「さてこそ〳〵、来たれ続け」

と引返せば、二人も共に飛んで行く。孫右衛門は飛立つ嬉しさ、『天の助けか忝ない』と、裏道見やつて伸上がり

「オヽそふじゃ〳〵その道じや。ソレその藪をくぐるなら、切株で足突くな」

と届かぬ声も子を思ふ、平沙の善知鳥血の涙、長き親子の別れには、やすかたならで安き気も、涙々の浮世なり

しょううつしあさがおばなし

生写朝顔話

〔解　説〕

天保三年（一八三二）大坂竹本木々太夫座初演。全五段、時代物。文政年間、山田案山子（近松徳叟）が儒学者熊沢蕃山の作と伝えられる『露の干ぬ間』という小唄をもとに想を構え、「生写朝顔日記」と題した浄瑠璃を竹本重太夫の為に創作しましたが上演に至らず、それを翌年、近松柳が「徳叟遺稿朝顔日記」という読本にして人気を呼び、耶麻田加々子が添削して浄瑠璃に仕立てました。その後、嘉永三年（一八五〇）萃松園が添補潤色したものが、現在の作品の基礎となりました。この浄瑠璃は、道中の名所が次々と出て来て変化に富み、すれ違いや錯誤・道化・慟哭等様々なドラマの要素が含まれることから、よく上演される人気作となっています。また、『露の干ぬ間』に琴唄を取り入れて、音楽的にも特徴のある作品になっています。

〔あらすじ〕

宮城阿曽次郎と芸州岸戸の家老秋月弓之助の娘深雪は、京の宇治で出会い恋に落ちます。折しも阿曽次郎は鎌倉出張の命を受け、別れ際、朝顔の歌を扇に書いて深雪に与えました。急遽本国へと引上げる事になった秋月家の一行が明石で風待ちをしている時、深雪は偶然阿曽次郎と再会しますが、それも束の間、二人は再び別れ別れとなり、国へ帰った深雪は、父から駒沢次郎左衛門に嫁ぐ様言い渡されます。駒沢次郎左衛門とは、伯父の養子となり名を改めた宮城阿曽次郎だったのですが、それを知らぬ深雪は、思い余って家を出、阿曽次郎を探す旅に出ます。

〈薬売りの段〉島田の宿の戎屋の主人徳右衛門は、不動参りの途中、怪しげな薬売りから煙草の火を借り、その礼にと笑い薬を買い求めます。徳右衛門が去ると、悪者の輪抜（わぬけ）吉兵衛がやってきて、先日捕まえて売り飛ばそうとした深雪に逃げられたので、探す手伝いをしろと薬売りに頼みます。薬売りは、元は立花桂庵という医者でしたが、このように落ちぶれてしまったわけを輪抜に語り、深雪探しの協力を約束するのでした。

〈浜松小屋の段〉放浪の末、辛苦から盲目となった深雪は、三味線片手に唄を歌って日々をしのいでいました。やがて深雪を探す乳母浅香と浜松で出会いますが、浅香は悪漢から深雪を守るため深手を負い、島田宿の父を尋ねるように言い残して息絶えます。

〈宿屋の段〉一方、駒沢次郎左衛門は岩代多喜太と共に島田の宿の戎屋に泊ります。岩代は同じ藩士であるものの悪人の一味で、しびれ薬で次郎左衛門を亡き者にしようと企てますが、宿屋の主人徳右衛門の機転により失敗します。はからずもこの宿で盲目姿の深雪と再会した次郎左衛門でしたが、任務の途中とあって、それと明かすこともできず、万感の思いで深雪の演奏する朝顔の唄を聞き、徳右衛門に目の秘薬を言付けて出立するのでした。次郎左衛門が残した扇から、実は阿曽次郎であった事を知った深雪は慌てて後を追います。

〈大井川の段〉阿曽次郎を追って大井川までやってきた深雪ですが、一足遺いで大井川は川止めとなってしまいます。失望の果て入水しようとした時、徳右衛門と下僕関助がかけつけ、深雪の祖父が大恩を受けた故主であると知った徳右衛門は、甲子生まれの男子の生き血とともに飲めば薬効ありという薬を深雪に飲ませる為に切腹、薬を飲んだ深雪は薬効により目が開きます。

その後、深雪は次郎左衛門と再会し、晴れて夫婦となるのでした。

宿屋の段

呼び立つる

むざんなるかな秋月の娘深雪は身に積もる、歎きの数の重なりて塒(ねぐら)失ふ目なし鳥。杖柱とも頼みてし、浅香はもろく朝露と消え残りたる身一つを、さすがに捨ても縁先の、飛び石探る足許も、危き木曽の丸木橋、渡り苦しき風情にて、やう〳〵座して手をつかへ

「召しましたはこのお座敷でござりますか。拙(つたな)い調べもお笑ひ草。おはもじ様や」

と会釈する顔も深雪のなれの果て、『不便の者や』とせぐり来る、涙呑み込みひかゑゐる。岩代はそれとも知らず

「ヤア、見苦しいそのざまで、我々が目通りへうせたは、ン、ンヽ聞き及んだ朝顔めな。エヽきり〳〵立ってうせをらう」

「ア、イヤ〳〵岩代氏。さう没義道(もぎどう)に仰せられな。こなたに呼寄せたればこそ、思ひがけのうアゝイヤ思いがけのう来たものを叱るは武士の情けにあらず。コリャ女。大儀ながら、その朝顔とやらの歌、サヽ早う唄うて聞かせい」

と望む心は千万無量。知らぬ岩代面(つら)ふくらし

「テサテ駒沢氏には、イヤモきつい御執心。コリャ〳〵盲目。なんなりとも、エヽ唄へ〳〵」

「ササ早く、〳〵」

「ハイ〳〵。唄ひまするでござります」

と焦がるゝ夫の在るぞとも、知らぬ盲目の探り手に、恋ゆゑ心つくし琴、誰かは憂きを斗為吟(といきん)の、糸より細き指先に、さす爪さへも八ツ橋のやつれ果てたる身をかこち、涙に曇る爪調べ

〻露のひぬ間の朝顔を、照らす日影のつれなきに、哀れひとむら雨のはら〳〵と降れかし

「ムヽ、夫を慕ふ音律の、我々が身にも思ひやられて、思はずも感涙いたした。ナウ岩代殿」

「いか様。琴といひ、器量といひ、イヤモなか〳〵感心仕る。イヤナニ朝顔とやら、そこは定めて冷えるであらう。身どもが傍で今一曲。サァ〳〵所望だ、〳〵」

「アヽイヤ、岩代殿、もう赦しておやりなされい」

「さりとては駒沢氏、身どもが望むを止めさっしゃるは、そりゃ意地の悪いと申すもの」

「アイヤさうではござらねど、かれも定めて疲れませうと存じて」

「ハヽしからば曲は止めにして、コリャ〳〵女。そちも腹からの非人でもあるまい。身の上話もまた一興。話して聞かせ、サヽどうだ、〳〵」

「ハイ〳〵よう問うて下さります。お詞に甘へお話し申すも恥ずかしながら、もと私は中国生まれ、様子あって都の住居。ひと年宇治の蛍狩りに焦がれ初めたる恋人と、語らふ問さへ夏の夜の、短い契りの本意ない別れ、ところ尋ぬる便りさへ、思ふに任せぬ国の迎ひ。親々にいざなはれ難波の浦を船出して、身をつくしたる憂き思ひ、泣いて明石の風待にたま〳〵逢ひは逢ひながら、つれなき嵐に吹き分けられ、国へ帰れば父母の思ひも寄らぬ夫定め。立つる操を破らじと、屋敷を抜けて数々の憂き目をしのぎ都路へ、登って聞けば、その人は東の旅と聞く悲しさ。またも都を迷ひ出で、いつかは廻り逢坂の関路をあとに近江路や、身の終はりさへ定めなく恋し〳〵に目を泣潰し、物のあいろも水鳥の陸にさまよふ悲し

さは、いつの世いかなる報ひにて、重ね〳〵歎きの数、憐れみ給へ」

とばかりにて、声を忍びて歎きける

※演者・時間等の都合により多少の異同がございます。予めご了承ください。